会　　議　　録

会　　議　　名	第７回　第２次小金井市芸術文化振興計画策定委員会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課		
開　催　日　時	令和２年８月４日（火）午後３時 - 午後５時		
開　催　場　所	オンライン会議ツール zoom を使っての開催		
出　席　委　員	大澤寅雄　委員長 伊藤裕夫　副委員長 小林勉　委員 水津由紀　委員 野澤佐知子　委員 福沢政雄　委員 戸舘正史　委員		
欠　席　委　員	小林真理　委員 西村徳行　委員 桑谷哲男　委員 山村仁志　委員		
事　務　局　員	１　事務局運営補助　特定非営利活動法人ＳＴスポット横浜 小川智紀、田中真実、荒田詩乃 ２　小金井市 コミュニティ文化課長　鈴木遵矢 コミュニティ文化課専任主査　吉川まほろ コミュニティ文化課主任　津端友佳理 コミュニティ文化課主事　小野智広 ３　事業実施者　特定非営利活動法人アートフル・アクション 宮下美穂		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由	可	傍聴者数	０人
会　議　次　第	１．計画の構造について －各項目について、内容を精査する ２．その他 今後の進め方について 意見交換等		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	・小金井市計画の骨子案		

（開会）

１．計画の構造について　　－各項目について、内容を精査する

【大澤委員長】Wi-Fi 環境が微妙で、止まる可能性があります。止まった場合は事務局に進行を預けます。床とテーブルで繋がりが違うんですね。今日の議事次第では計画の構造について議論することになっています。昨日議論した骨格のＡ案Ｂ案のうち、Ｂ案で議論を掘り下げていきます。Ｂ案の内容の説明をお願いします。

【事務局・小川】こちらのほうで画面の共有を進めさせていただきながら、ご説明します。1 次元、2 次元ということで、「文化芸術のいまここ性」という形で、最初に範囲の話をして、文化資源、その中でも市民協働、社会教育、学校教育の話をして、その後に社会的包摂のこと、パブリックスペースのこと、施設の特色もここで片付けて、小金井の文化芸術はいまここで何が起こっているかをまとめてここでとりあげるのが 1 章です。下を見ていただくと、1 次元、2 次元という形で、方向性、矢印になるというイメージで、市民自治を道具として使えないのか、という形です。市民自治の中で市民意識があり、担い手があり、ＮＰＯの協働ボランティア、学校の連携、行政と市民、学芸員、専門の芸術職、情報の受発信、組織体制の話、プログラムの特徴、アクセスの話ができないかと言うことです。面的な変化、時間的変化と持続について考え、公共性の話、活用の話、行政の役割と評価がまとめてできないかというところです。この画面は、みなさんが付箋で出したものをデジタルでまとめていますので、動かせたりします。Ｂ案をどういった形でまとめるか。ひとつは 10 年で考えることがキーポイントかと思いますが、小金井市の吉川さんお話しできますか？

【事務局・吉川】なぜこんなに長いのかは、私もこの計画を作った時におりませんので、言いようがないのですが、ある程度長い目で見ていただかないと成果が出てこないということかと思います。10 年やってみて、やはり少しずつしか意識の変化がないですから、小金井市民の意識を芸術文化に向けて上げていくという意味では、10 年という一区切りは良いかなと思います。

【伊藤委員】計画自体は、他の自治体では、基本計画だと 7 年とか 10 年のスパンは多いですが、実施計画は長くても 5 年くらいで作っているケースが多い。前回の小金井の計画は 10 年なんですが、ステップを置いている。そのような形のものがありますから、10 年で行く場合においても、中間的に目指すべき階段を作った方がいいのかなって感じがしています。確認をしたいことがいくつかあります。ひとつは、Ｂの方向になっていますが、僕としては、最初の計画の基本に、この 10 年間の成果をきちんと書いた方がいいと思います。戸舘委員が「小金井市芸術文化振興計画評価・検討有識者会議」の報告書をまとめていますよね。それをダイジェストにして、何をやったかできていないかを整理して、冒頭のどこかに補ってほしいです。2 つ目として、文化芸術の範囲という所に関しても、桑谷さんが述べていたように、限界芸術の考え方が小金井にあって、幅広い世代そして市民が参加している日常の文化を大事にするところが必要だと思います、文化芸術のところに、小金井市はどんな範囲を考えてい

るということを打ち出した方がいいのかなと思います。構成に向けて、触れておきたいのが、学芸員と言う言葉が大きくフューチャーされていますが、あくまで専門職って意味だと思うんです。市民に対して一定程度トレーニングを受けた人が一方的に君臨するんじゃなくて、どう市民と一緒にやっていくかが大事で、むしろ芸術専門職といういい方がいいのではないかと、気になりました。公共性という言葉は誤解を受けやすいので、もうひとつしっくりきていないです。文化的コモンズの方が小金井の今までの議論の方が伝わりやすいんじゃないかと思います。

【大澤委員長】このタイミングでご意見いただくポイントとしては素晴らしいコメントをいただいたと思います。B案で進む場合に、最初に言っていただいた今期の基本計画の評価をダイジェストで振り返る場合には、B案の枠組みとして進む場合にも、なぜ今ここにいるのかを再確認するうえで大事なポイントだと思います。ありがとうございます。

それぞれの章ごとの固まりの中で見て、この整理の仕方でいいのかな、このパーツはこれでいいのかな、ということを第1章から見ていただきたいと思います。あらためてもう一回観ますと、最初は範囲、というのか、こうとらえているというメッセージにするという性格のものが私も良いと思います。文化資源の回に、市民協働、社会包摂、パブリックスペース、施設の特色となっています。この辺りの骨組みの筋についてご意見あればいただきたいんですが、いかがでしょうか？

【伊藤委員】三次元って話について少し考えたんですが、三次元の考え方というのを文化資源、市民自治、活用って形に描いているわけですが、文化資源をあるもの、今小金井市にあるものという風にとらえたいと思います。すなわちこれまで作ってきたもの、そして課題、こういったものを文化資源として捉えていく。まずは現在環境の中にあるもの、新たに求められるものを資源としてつなげようではないかという、そういう考えがまず最初にあります。あと、三次元というのはレイヤーとして考えたいですね。第一に今あるものが底辺にあり、それを進めていくために何が重要なのかと言うと、担い手が第二に挙げられます。市民の中には関心ない市民もいますし、他方でアクティブになっている市民もいます、さらに、美術館もありますし、文化施設も入ってきて、そこには専門職の方がいる。市民の中にも長く活動をされてきた人がいる。そういう専門家、担い手の中には幅広いグラデーションがある。それをどうつないでいくかが三番目のレイヤーで仕組みです。仕組みの中にも広報もありますけど、自治体連携の仕組みもあります。また、文化施設がコアになるかはどうかとして、文化的コモンズがそこから生まれてくる仕組みとして市民のネットワークをとらえる必要があると思います。整理しますと、三次元というのはすでにある、これから直面している課題があって、動かしたり変えていこうという形で人間のネットワークがある。その中ではグラデーションがある。それを動かしていくためには、ネットワークづくり、ＮＰＯ的なものから評価までその 3 重構造でとらえると B 案がすっきりしてくるのかなって気がしました。

【大澤委員長】ありがとうございます。今ここにあるものを確認する形で文化資源を

列記していく、そのなかで地域創造という機関が、あらゆる文化的営みに誰もがアクセスできるような広い意味での場所として入会地という、誰もが出入り自由な領域、それを文化的コモンズとある報告書で書いています。小金井市の文化的コモンズについて整理するところが、第１章、いまここで語られるといいなということでした。他に文化資源というところで並べた項目もそうですが、第１章でお気づきになった方、ご意見はありますでしょうか。文化的コモンズに関する調査研究は、私もお手伝いさせていただいていて、文化的コモンズを形成するのにホールは重要な役割を果たすんだというメッセージを出したんです。建物が大事なのではなく、ゆるやかな意味での場、人、仕組みが、文化的な誰もが共有できるエリアを形成していくということです。建物より、それを拠点にした営みということがイメージできるといいかなと思ったりします。行政的に気になるのは、今までの文化振興のくくりでは、ホールや美術館の話がわりと下位の方にきてしまうという順序について、違和感があるかどうか、鈴木課長ご意見ありますか？

【事務局・鈴木課長】ソフトとハードがあって、遅れていたハードの整備を進めていると思っています。個人的には、ソフトを中心に書かれることに違和感は特段ないです。

【大澤委員長】建物の整備等は、いまのところ計画案では書かれていません。それをどう使っていくか、そういう話が中心にきていて、優先順位としてホールや美術館があるのではなく、ヒエラルキーがあまりない、対等に扱う姿勢のまま議論を進めていきたいと思いますが、ご意見ありますか。

【水津委員】小金井の場合、たくさん公的な場所があります。ホールも小さいのがひとつあるだけで、文化を振興するためにホールを中心にするより、ネットワークや民間で運営しているスタジオも含め活用して振興できるような内容になったら現実的だと思います。違う形の文化振興をめざすということの方がしっくりくると聞いていて思いました。

【大澤委員長】とってもこれは大事な部分で、世田谷区は世田谷パブリックシアターがある、墨田区ではすみだトリフォニーホールというような文化資源の明確な地域もあります。宮地楽器ホールも立派なホールだし、はけの森美術館も立派なコレクションがあるけれど、強力な中心性ではないわけですね。むしろ小さな場所がネットワークを組んでいくことの重要性があります。今期の計画では、それが難しかった。ここまでの 10 年間の基本計画の部分では、ヒエラルキーは無く資源を並べていく形はいいんじゃないかなと私も思いました。

【伊藤委員】質問です。小金井には、コミュニティＦＭとか、タウン誌がありますか。重要な役割を果たすんじゃないか。ネットワークをつくるときに重要だと思います。

【事務局・鈴木課長】コミュニティＦＭはありません。かつて小さな FM 局が活動したこともあるんですが、今はありません。タウン誌といったときに、地域の新聞みた

いなのはあるんですが、タウン誌というものとはちょっと違うかな。ぱっと思い浮かばないですね。

【水津委員】文化協会がネット配信みたいなのしていますよね？その種類の情報発信をしていると思うんですけれど。

【福沢委員】文化協会の会員ですけど、定期的に出しているのは機関紙ですね。文化協会ではこういうイベントの情報提供だけで、それ以外はやっておりません。言いそびれたことですが、今回のテーマになった、第１章が「いまここ」ということですが、私の理解する範囲で、文化芸術の範囲や文化資源という枠内になるでしょうが、まず場の提供、物理的な場のほかに機会があります。まず、はけの森美術館やマロンホール、公民館とか民間のギャラリーが市内にあります。市民まつりの中で踊りをするとか、お月見もあります。ですから、そういうものが今回の計画に含まれるかは別ですが、あります。先日のテレビ番組に出ました、個人の家で絵を見せてお茶を提供する場もあると思います。日常的に芸術とか文化でどういうものが行われているかというと、これはグループとか個人による、絵や写真のつどいもあります。舞踊とか、キッズダンサーや、阿波踊りの企画もあります。あとは、オーケストラ、コーラス、ハーモニカのつどいもあります。文化資源をとしては、中村研一さんのはけの森美術館も資源です。安野光雅さんも人的な資源だといえます。角度を変えると小金井は公園が三つあって、優れているところではあるんですが、芸術的な付加価値をつくると、ひとつの資源になるんじゃないかなって思います。ひとつは、伝統文化という切り口で見てみますと、貫井林、小金井囃子、操り人形、薪能などを文化の資源としてみてもいいんじゃないかなという気がしました。

【大澤委員長】小金井市の文化資源が網羅的に集まっているなって実感しました。文化資源という時に、建物とか場所だけじゃなく、機会、チャンスであったり、人であったりします。それらは技術とか専門性でもあるけれど、音楽、演劇、美術と分野で整理することも多かったと思います。今の話を聞きながら、これまで埋もれていた、関係ないと思っていた文化資源が、分類の仕方によって距離感が違ってくるかなという気がしました。いい情報をいただきました。

【オブザーバー・宮下】「184magazine」という雑誌は、市民がやりはじめて行政が予算をつけて、市民が編集し続けているんだと思います。「き・まま」という雑誌もあって、大事なのは小金井市だけを主題にしているんじゃなく、多摩地域のこと全部をいろんな角度からピックアップして特集している。大事なのは、この点で彼女たちが雑誌を作るためにいろんな人たちをつなげたところです。あとは、野川べりに、陶芸をやっておられる方がいるんですけど、陶房が開いている時間でベーグルを売ったりカフェを始めた人がいます。民間の普通の人たちが横つながりの中で場所を自ら提供し、ルールとマナーを自分たちで作って行くことが散見されます。文化的コモンズの一種だと思っているんです。行政がこういう計画を作って、たまたま事業をきっかけにして出会うわけですけど、他のお宅でも自分たちの庭を公開したり、イギリスのフットパスみたいなものだと思うんです。裏庭を通っても良いよっていうルールで

す。自分たちがルールを守り合うことで、便益を享受する。誰かがコントロールするよりかは、もっと人々の共感によって成り立っていること、フットパスに似たようなものが市の中にたくさんあるんだと思います。それは大事なことだし、民主的だし、学校から帰ったら親がいないから、よそのうちに行くみたいな機能を持っていたり、面白いもんだなと思います。

【大澤委員長】小金井らしさがどんどん言葉になっていくと思います。従来のホールとか美術館だけじゃなく、個人のお宅を解放している営みまで文化資源だって捉え方になると、文化資源の範囲を語るときに、小金井市の場合は国が定めた文化芸術に加えて、いま言ったようなさまざまな営みも文化資源としても考えていますということを、整理していまここってことで整理できると非常にいいです。

【戸舘委員】伊藤委員がいわれたタウン誌のニュアンスに一番近いのが「き・まま」だと思います。いろんな角度から、文化資源を取材されている、ミニコミ誌です。第一章の市民協働や社会包摂は、昨年の現計画での評価のポイントだったんです。市民協働、社会包摂、文化施設、教育、の四つの視点で、現計画での評価をしていきました。吉川さんの発言があったと思うんですが、教育や社会包摂は、他の行政のセクションでもうたわれている視点ですが、所管との連携がうまくいかなかったことが現計画での反省というか、次に乗り越えなければならない視点である、と。この計画に書かれていることは、文化の担当だけではなく、例えば教育委員会であるとか、福祉のセクションなどと協働するなかで文化資源の活用が展開されていくと思うんですが、行政の人が見た時に、文化資源のなかに社会教育、社会包摂が入っている中で「これは文化の分野のことでしょう」と見られないかなって懸念があるんですよね。行政が所管主義を超えて計画を推進してく中で、セクショナリズムを超えていくための何か仕掛けが欲しい。これからのひとつの論点にしていきたいなって気がしました。ちょっとした総合計画のミニチュア版になっています。市全体のまちのかたちみたいなものを文化の観点から考えていますという、ひとつのステートメントでもいいわけで、行政のなかの所管とどう組んでいくかを念頭に置きながら仕組みを考えたらいいかなと思います。

【事務局・吉川】戸舘委員から行政の中でのつながりという話がありました。先ほどの福沢委員のお話の中でも、市の中にいろいろな文化資源があるという話もありました。市民まつりや江戸文化体験事業とか、それぞれの事業の担当もしているんです。たとえば市民まつりは、お稽古ごとなど小さな単位でのグループがそれぞれ活動をしている。けれど、その人たちは芸術文化振興計画のことは知らなくて、こういう市の施策のもとに、どうつなげていけばよいのかということがジレンマになっていました。文化施設の問題もあるんですけど、個々の市民の方が活動していらっしゃることを次の計画の中でどうつなげていけるのかということは、今後考えていかなければならないと思います。加えて、行政の中でも繋がっていかなければならないと思うんですが、たくさんある小さな点の文化資源をどうつなげていくか、その元締めにこの計画がなっていければと思います。

【大澤委員長】小金井市の文化芸術基本計画で、文化資源の捉え方を拡張することで、捉え方が拡散しちゃって、芯がなくなっちゃうんじゃないかなと思ったんです。だけど、もっと拡張すると見え方が変わる。音楽、演劇と分野ごとに見ていたのを違う切り取り方をすると、家の中を解放して絵を見せている人もいるし、いろんな機会がある。そうすると私が関係ないと思っていた美術と違うかかわりを持てるんじゃないかなという気がしています。文化資源の拡張をすることで、新たなつながり方を見つけだす、発見できるという捉え方をしてはどうかなと思います。市役所の中の部局を超える文化芸術のつながりを持つ必要もあるし、あるべきつながりが、つながっていなかったことを、またつなげることも必要かと思います。そのあたりは、また丁寧に第1章をほりさげて書いていく書き方にも関わると思うので、もう少し今出てきた意見を付箋紙で整理しながら作り続けていく作業としていいんじゃないかなと思います。

（休憩）

【事務局・小川】本日お休みの桑谷委員よりコメントをいただいています。以下は、桑谷委員からのコメントです。
昨日も、少し考えをいわせていただきましたが、その延長にある意見です。ワークショップでは意見に上がりませんでしたが、骨子の項目としてあった方がよいと思われるものと変更があります。
・「芸術文化の予算と経営」今まで、このような議論の場では検討されませんでした。このことの検討なしでは、せっかくの骨子が絵にかいた餅と化します。
・「学校教育と幼児の教育」子どもの感性を育てるのは学校教育だけではなく、それ以前の幼児教育についても視野に入れるべきと思います。そのことを推奨するのは、アートコミュニティ以外の人を引きつけられない悩みを解消するためには、限界芸術の再発見が必要だと思います。
・「人間の尊厳と他者との共存」社会包摂に代わる言葉として骨子の項目としてあげました。芸術に関わる人間として社会包摂という言葉は、過去に使用したことがありません。あくまで私の個人的な考えです。
　芸術文化の目的の一つは、「人間の尊厳と他者との共存」を獲得することです。憲法の１３条にも書かれていますが、個人の尊重です。社会包摂はそれらに含まれていると思います。
以上です。

【大澤委員長】学校教育の手前の文化資源のところになるか、あった方が良いのかなという気はしましたし、文化芸術は何のために必要なのかというところで、人間の尊厳なんだって気がしますし、かなり大きなところからそのようなメッセージはあっていい気がします。

【水津委員】文化芸術を考えた時に、良いものを見ることも大事だけど、自分たちが楽しむってことを保証してもらえないと繋がって行かないと思っています。自分でみて楽しんで、それでまた良いものを見て、という相互作用があることが文化を楽しむ根源であるので、そこはあえて書いていかないといけないと思います。また、わたく

しの得意な乳幼児の事業も書いていただきたいと思っています。「のびゆくこどもプラン　小金井（第 2 期小金井市子ども・子育て支援事業計画）」にも関わっているんですが、そこでもなかなか文化に触れられていなくて、それは芸術文化振興計画があるからそこでということだと思うんですけど、学校だけじゃなくて、いろいろなところに子どもがいるので、まちのなかでさまざまな文化に触れるイメージは持ちたいなと思っています。

【大澤委員長】ありがとうございます。では、事務局から第 2 章の説明をお願いできますでしょうか。

【事務局・小川】伝えていく、広げていく、深めていくために、というところで、大ぐくりをどう伝え広めていくか、ということを市民自治であるという風に仮定した時に市民自治のこと、担い手のこと、専門職のこと、どう手を取り合ってつなげていくか、ということで、担い手の中では NPO、ボランティア、協働、連携が入っています。専門職では、どこまでが仕事なのかは難しいですが、協働、情報の受発信、プログラムの特徴、アクセスの問題として足を運ばない人にどうアプローチするか、見に行かない人にどう出会うか、が書いてあります。担い手と専門職はどこからなのか難しいですが、こんな形で分けてあります。

【大澤委員長】アクセスのところを、専門職、学芸員の位置づけの中に入れているのは、議論の経緯の中でもはけの森美術館は遠いから来てもらうにはどうしたらいいかという問題や、第３章と第２章で、何を組み立てるかですが、アクセスの部分と広報の話、第３章の筋の中で活用方法、交流広報、ＰＲ、知られていない、情報が行き届いていないという課題は委員のみなさんの多くで共有できていると思うんですが、そこの部分を時間的な変化の部分より、つながり、とか、ひろがりに持ってきた方がいいんじゃないか。広報ＰＲとアクセスを近いところに持ってきた方が良いと思うんですがいかがですかね。このポイントで意見がある方いますか。

【戸舘委員】正直な考えをいうと、計画の中に広報ＰＲが入っていることに違和感があるんです。面的なひろがりを周知させていくための道筋は作った方が良くて、広報・ＰＲというカテゴライズにしているんでしょう。しかし本当は、文化芸術の範囲を拡張していく、その中に教育とか福祉とか社会包摂って問題を紐づけていく、それが結果的に面的なひろがりになるわけです。学校教育をどうするとか、市民とか協働をどうするかに厚みを持たせれば面的なひろがりにもつながっていくわけです。広報とかアクセシビリティみたいなことで特化して書いてしまうと、計画なのにマニュアル、指南書みたいになってしまう。市民の人たちが自由に活動できることを保証するということに力点を置いた方がいいんじゃないかなって思います。面的に周知をはかるってことに異存はないですが。

【伊藤委員】さっき１章・２章・３章は、レイヤーだといったんですが、レイヤーは重なっていいと思うんです。市民協働にあたるのが市民意識、社会教育に重なっているところに担い手が入ってくる。重なりを見ていくとアクセスの問題というのは、社

会包摂としては 1 章に入ってきます。そういうものにどうアクセスしていくかというと、専門職や担い手が入って来る。それが仕組みになると、多くの人たちに巻き込んでいくということはあると思います。こういったものが層をなしているという風に考えていくと、今までの議論が 2 重 3 重に入っても良いと思います。その方が見えてくると思いますし、課題現状がどのような形で進化していくのかが発展的に積み重なっていく計画にしていく必要があるのではないか。アクセスの話を専門職や担い手のところに移した方がいい気がしています。

【大澤委員長】レイヤーを考えた時に、さっき聞いたテーマなんだけど、それが繰り返されることで新たなひろがりを持って認識されることが起きる。レイヤーを超えてスケルトンになっているような立体感があると面白い基本計画だなと思います。アクセスというキーワードは駅から遠いとかね、割とそういう議論が多かったんですが、障害がある方が、行きにくいバリアをどう超えればいいかというアクセスの問題もあるし、関心のない人が入りにくさのアクセスの問題を同時に抱えているわけです。レイヤーで語られると、立体的になるとわたしも思いました。戸舘委員の話で、10 年間の基本計画をあたる中で、あまりにも広報 PR は戦術というか細かい話過ぎるきらいがあるという意見でしたが、知らないとか関心を持ってもらえていないという状況を認識して、今までとは違う伝え方が必要だということを計画で語った方がいいんじゃないかと思います。

【小林勉委員】お話を聞かせていただいて、いち市民の立場として思ったことは、はけの森美術館のアクセスが悪いなってことは今まであったと思いますが、障害がある方やそこまで行けない方とか、そういう方のために、今の時代では instagram や youtube で作品を見ることがあってもよくて、それが学芸員とか広報につながっていくと思うんですが、書くか書かないかではなく、連携がうまくいくといいなと思いました。

【大澤委員長】コロナがあったことで、海外にいながらみなさんと会議ができることもあるし、アクセシビリティは 10 年間で圧倒的にかわる必要があるなって思います。今のアクセスのことは充分な論点が出たので、そこは保留にしておいて、他はいかがですか、第二章についてご意見お願いします。

【野澤委員】広報・PR に関しては、基本的な方向としては違うかなと思ったことぐらいでした。

【大澤委員長】基本計画は大きな話を取り上げる中で、些末な話はどうかということもあると思うんですが、コロナ禍で会を休止したあと、前回の会議でみなさんと再会して話をした時に、関心のある人とない人のギャップを埋めればいいんだろう、という意見が多かったことを思い出しました。広報として一言で書くかどうかは別として、知られていないことをどう考えていくか、埋められるかを考えたいです。

【水津委員】担い手という表現は一般的なんでしょうか。私のようなこども劇場の人

間にはわかる言葉なんですが、ここは担い手より文化コーディネーターとか具体的な言葉の表現の方がいいかなって思ったりするんですが、どうでしょうか。

【伊藤委員】僕自身も担い手って言葉がこういう形で入るのは違和感を持ちます。すべてが担い手だと思うんですね。この部分は、コーディネーターという言葉がいいのか、あるいはつなぎ手という言葉の方がいいかなって、思います。広い意味での担い手ということを考えたいです。「三つの文化と三つの担い手」という、ジョン・ホールデンという英国の文化政策研究者の論文があります。その中で専門家と一般の市民と行政では、それぞれ文化に対しての関心が違うと書かれています。行政は道具としての文化、専門家は「芸術は芸術だ」という制度としての文化、市民は息抜き、娯楽としての文化を求めている。それぞれ市民と専門家と行政は全然違う文化を語り合っているからうまくいかないんだと言っている。市民意識のところに、市民が求めているものは何なのかをはっきりさせた方が良いのかなと。その上で担い手である人たち、市民のなかでのアクティブになってきた人たち、いわば支え手、つなぎ手のＮＰＯ的な機能と、専門職の人たちをどうつなげるか、次の 3 章につないでいく問題提起がここでできればなと思っています。

【小林勉委員】質問です。担い手というのはイメージが湧くんですが、つなぎ手の方がわからないです。現行の計画でも書いてあるんですね。それは何と何をつないでいるという風に書いているのか、またそれが 10 年やってきて、どうなったのかを知りたいところです。

【伊藤委員】現行の計画についての説明は、吉川さんなどにお願いしたいんですが、一般的にはつなぎ手は、市民と専門家をつなぐこと。専門家の中には芸術家もいます。その両者が出会った場合には、片方が知識があって、片方は趣味でやっている。その間には落差もあるので、お互いのやりたい、つまり専門家たちがやりたいことと市民が何を求めているかを理解し、出会いをつくっていく。それがつなぎ手の定義だと思うんですね。担い手という言葉は人によってニュアンスが違います。広く取ると芸術家も担い手ですし、一人ひとりも享受する、楽しむ点において、市民も担い手です。つなぎ手の方がもう少し明確かなという気もしますが、でも曖昧な面もありますので、計画に書く場合には定義を注として書いた方がいいと思います。

【事務局・吉川】つなぎ手という風にいわれたら、やはり計画にある市民による実施主体、アートフル・アクションがつなぎ手になってほしいと思っています。今までの議論のように 10 年間振興してきた点の文化資源がいっぱいあります。全部つなげるのは難しい問題で、10 年経っても道半ばであると、先ほど宮下さんがお話しされたように、小金井アートフル・アクションの事業の中で新しい文化資源が、個々の市民の方たちの活動が育っていっていると思うことはあります。そこはつないでいっているのではないかと私は自負しています。

【事務局・小川】3 章について説明します。第 3 章の扱いは悩んでいて、面的変化、時間的変化、持続に向けてどういったことがあれば、この先の 10 年この計画がもつ

か、伊藤委員からご指摘があるか、公共性でくくるのがいいか文化的コモンズの方が発展性があるんじゃないかということもありましたが、このあたりの部分です。文化施設の活用方法、この先 10 年どう考えていくか、ということの中で、広報ＰＲの部分、文化施設に限らず自治体地域連携、行政の役割のことで、評価も項目があります。稼働率、入館者数の話もしたんですが、コロナ環境にあって、入館者数はどうにもならないみたいになっていて、経済効果を軸にした効果のあり方自体が、いまは通用しないことになっています。現行の計画の中では評価委員会を置くってことになっていましたが、きちんとした評価委員会を置くことができませんでした。こういったことを評価の軸が変わるってことも考えながら、評価をどうとらえていくか、この先 10 年を思ってこの案を作ってみました。

【大澤委員長】ありがとうございます。それぞれ章ごとの冒頭に来ている項目が、大きな概念を語ることになりますね。第一章は文化芸術とはなんだろう、第二章は市民自治とは何だろう、第三章は公共性とはなんだろう。それは、非常に、点から線、線から面と言う構造を持っていて、骨格から肉付けをしていくのが豊かな感じがしています。公共性という言葉について、はたしてその言葉が適切か、とはいえ文化的コモンズという言葉は私自身も思い入れのある言葉ですが、一般の市民の方にはまだ普及していない言葉なので、なんかこのあたり良い言葉はないかなって思います。そこの問題に限らず、ご意見やご質問のある方いらっしゃらないですか。

【伊藤委員】気になるところですが、行政の役割に評価があるんですね。もちろんそうじゃないと思うんですが、行政が評価の主体に見えているのは、まずいと思うんです。そういう意味において、行政の役割をいかに限定していくのか、その中で評価の主体はどうするのかという話の展開にしないとまずいと思います。重要なのは交流って形でまずは、行政においても、行政間交流とかが必要になって来るとか、伝統的な地域文化と、生活文化、ハイカルチャーであるような芸術文化の交流が対話していく要素が重要になっていくんだなと思います。そのために広報ＰＲって考え方はおかしい。アウトリーチだとかアクセスだとか、そういった言葉に置き換える方がすっきりします。つなぎ手が入って来るような見方の方がいい。他地域との交流は、自治体とか地域間交流だと行政主体になってしまうので、市民たちが行政枠を超えて交流していくことをいいたいはずなんですよね。そういったことを、公共性って言葉も含めて、どうしても日本人の場合、つねに行政にどうなっているんだって問う話になると思うんですが、そこに気を付けてほしいです。

【大澤委員長】桑谷委員からのコメントで予算を位置づけないという意見があり、3 章の所に入れた方が良いと思ったんですが、小金井市で議論してきた方向性とも違うと思うんですね。でも、継続性という観点で財源とか予算を位置づける必要があると思うんですが、公共性という考え方で、行政がやるもんだって方向にひっぱられないように気を付けないといけないと思います。他にお考えはいかがでしょうか。

【伊藤委員】予算の話は、難しいなという感じもしているんですが、埼玉県の某市で計画の中には入れなかったんですが、文化のための市民基金という案があるんです

ね。基金はゆくゆくは市民の寄付によって成り立つひとつのコミュニティ文化財団的な場にしたい。ただ、すぐに寄付は集まらないので種銭として寄付を集めて行く、徐々に寄付が集まってくればマッチングで行政からも出していく。その基金の名前でファンドレイジングもしていく。国の予算等にもアプローチしていく。その中ではふるさと納税も考えてもいい。そうすることでその地域に住んでいない人のお金も集める。地域で有名になった人は寄付をするみたいな、成長していく基金をつくろうじゃないか。そんな議論をしているところです。そのような形での予算の考え方が必要です。どうしても予算は文化施設が一番付きやすいんです。したがって計画は文化施設の活動が中心になっていき、議会に対する説明のために、計画に文化施設の役割が書かれている。もっと幅広い市民の活動に対して予算措置をするために、行政のお金だけに頼るのはまずいんじゃないかなと思っています。小金井で宮下さんが苦労して市の予算をほとんど使わないで事業をやってきたのは、評価して良いと思います。そのことは、もっと継承していきたいと思います。

【野澤委員】先ほどから出てきている言葉は、本当に全然分からないと思っています。アウトリーチとか文化的コモンズは、みなさんの話を聞きながら、一生懸命調べながらスマホで調べている状態です。こういう基本法のようなものの中で、みんなに分かりやすい言葉を使用するのが前提であれば、難しいです。いま聞いたふたつの言葉はわたしの辞書の中に入っていない言葉でした。

【大澤委員長】大事なご指摘です。新しい言葉があることで、新しいことをやろうという表明であり、それが、ひっかかりようがない、そのことが距離を生んだり、アクセスできないことがあるので、そのあたりは新らしい言葉は使わないとかではないですが、丁寧な説明とか、ひっかかりや新しさをどう伝えるかは非常に重要だと思います。ほかにいかがですか。Ｂ案の方向性の肉付けの輪郭が見えてきたような気がしました。

【事務局・荒田】事業をやるなかで、この問題に対して何かを解決しようという形ではなく、学校での気づきが全然違う事業の気づきに繋がったり、ひとつの事業で出会った方が他のことを始めたり、さっき宮下さんが藤本陶房でお母さんたちがカフェをはじめた話をしていましたが、ひろがりみたいなこと、新しいことはつながりの狭間に生まれると思うので、そういう出来事をうむ記述はどうすればいいんだろうということを考えていました。新しいことでもあるし、横断的なことでもあるし、有機的な活動のなかでいろいろなことが生まれていくことがどうすればいいのかなということを思いながら話を聞いていました。

【大澤委員長】計画づくりの中で行政がつくる計画に関しては、筋や理屈が通っている、ロジカルに理屈漬けができていて、この通りやればいいんだよということが見えていることが良い計画といわれている。けれど、私たちが文化芸術振興でやろうとしている計画は余白があったりすることで偶発的な産物が生まれたり、出会いが生まれたり、広がりが生まれたりということが起きる方が計画としては良いんじゃないかということが話をしていると思うところなんです。ここまでの時間で大きな骨組みと中

身について違う意見は無かったし、気を付けなければならないポイントも出てきたと思います。次の段階でそれがある程度の文章というか、中身を伴って骨組みと肉付けに持っていきたいと思います。昨日と今日の議論の中で骨組みと肉付けの輪郭が見えてきた気がしました。事務局から次の進め方についてご説明いただけますか

２．その他　　今後の進め方について　　意見交換等

【事務局・小川】2 日連続ありがとうございます。少しお盆休みを挟んで、この後、8 月 26 日、27 日に続きをお話しできればと思います。公募委員の選考も進んでいると思いますので、進捗もお伝えできると思います。これで終わります。ありがとうございました。

――　了　――